



安積の詩



福島県立安積高等学校

〈目 次〉

発行にあたって	桜桑会長 阿部 貞彦
刊行に寄せて	学校長 水野 信
☆校 歌	1
☆紫の旗ゆくところ	3
☆天地の正気(凱歌)	5
☆送 歌	7
☆勝利の歌(迎歌)	9
☆霜に乱るる(声援歌)	11
☆唯に血を盛る	13
☆嗚呼天日の輝きに	15
☆チャカホイ節	17
まだ沈まずや敵艦は	19
あの娘はだあれ	19
天は晴れたり	19
磐梯風はヨー	19
敗 歌	19
ベースボールの歌	20
団 歌	20
剣道部	21
競技部の歌	21
柔道部の歌	21
安高小唄	22
五十周年記念式行進歌入選作	22
安高賛歌(八十五周年入選作)	23
安積高校百周年記念賛歌	25

(☆印はCDに収録)

発刊にあたって

桜桑会長 阿部貞彦（六十一期）

「桜桑会」は、昭和四十一年、安積の育英を目的とする団体として設立されました。旧制安積中学当時の校章の「桜」と、新制高等学校になってからの校章の「桑」の双方を合わせて「桜桑会」と命名し、現在まで三十数年間、部活動の後援と奨学金の助成を一層活発にするための活動を展開してきています。

校旗と校歌は、大正十年に生徒から募集して選定・制定されたと記録されています。

安積には、校歌の他に二十曲もの応援歌があります。しかし、校歌には譜面があるのですが、応援歌には歌詞だけが保存されていて譜面が残っていません。これまで何十年も口伝い・耳伝いでできており、中には長い間に音程が幾分変曲？されてしまった箇所もあります。そこでこの度、本来の歌に戻すべく日本作曲家協会の斉藤重男氏に楽譜を整えていただき、世界的作曲家である湯浅譲二先輩（六十期）に監修をお願いし、歌は武蔵野音大教授で声楽家でもある小田清君（六十一期）に吹き込んでいただいてCDに収録しました。今後大いに活用していただけるものと期待しています。

生徒諸君も、在校時だけでなく生涯を通しての座右の歌として本歌集を有効に生かして存分に謳歌し、勉学に部活動に健闘されるよう祈ってやみません。

最後に、本歌集およびCDを作成するにあたりご尽力を賜りました校長先生を初め諸先生方、桑野会、OBの方々、他関係者各位に対し心より感謝申し上げます。ごあいさついたします。

（一九九八・四・二）

刊行に寄せて

学校長 水野 信

平成十年四月、創立一一四年目の新たな歴史を刻む本校の新装成った広い校門を入ると、古木の立ち並ぶ中に泰然として構える安積歴史博物館（旧本館）を前にして、その堂々とした勇姿が鮮烈に目に映り、今日まで悠々と流れ来た歴史の重みにあらためて感慨を深くする。開校以来、一世紀を越える星霜を経て培われてきた輝かしい伝統のもと、その数、二万八千有余名の方々がこの門を通り、学舎ですごしてこられている。

桑野会の総会と懇親会が、全国各地で開催されている。総会に先立ち、参会者全員によって校歌が斉唱される。そこには、若い方から七十期以上も離れる御高齢の方まで、社会のあらゆる場において指導的立場に立って活躍し、その重責を果たしておられる方々が一堂に会している。そのうえ、年齢差を少しも感じさせない和やかな雰囲気がその場を包みこんでいる。寝もたけなわになると、校歌だけではなく、安中、安高時代に多感な青春を謳歌した数々の応援歌が披露される。安積の歌には、同窓の人たちをして心を通わす絆を覚えるのである。

このたび、桜桑会のご協力によって歌集「安積の詩」が刊行されCDが製作された。そして、この歌集が版を重ねることになった。この歌集によって、いつでもどこでも安積を思う心の歌が愛唱され、流れゆく安積の歴史に溶け込んでいくことを願うものである。

関係の方々へ心より感謝申し上げます次第である。

（一九九八・四・二）

福島県立安積高等学校々歌

校 友 会 作 詞
原 田 敬 一 作 曲

♩ = 102

わ か く さ も ゆ る あ さ か の や く も に そ
び ゆ る あ だ ー た ー ろ ー う ー
こ か げ さ ゆ ら ぐ か ぜ も な く い と
く の は な の か ぐ ー は し き ー
い し ー ず え ー か た き ま な び や に は ー げ ー む ー
わ が と も さ ち ー お お ー き さ ち お お ー き

-1-

福島県立安積高等学校々歌

福島県立安積中学校校友会 作詞
福島県立師範学校教諭・原田敬一 作曲

- 一、嫩草萌ゆる安積野や 雲に聳ゆる安達太郎
樹影小揺らぐ風もなく 懿徳の華のかぐはしき
礎かたき学宮に 励む吾が儕幸多き 幸多き
- 二、開成山の春の色 翳す徽章も桜花
五十鈴の湖の秋の月 理想の光明仰ぎつつ
文の林に分け入りて 学べ吾が儔とことには
とことには
- 三、七州の覇と謳はれし 榮譽ある歴史徳ぶ時
先進の意気身にしめつ 熱誠事に当りなば
海内比なき校風の 確立などか難からむ 難からむ
- 四、吾が桜章の健男児 山より高き気を奮ひ
水より潔き志操もて 文武の道を一途に
皇国の為に竭しなば などか偉業の成らざらむ 成らざらむ
- 五、磐梯の嶺荒ぶとも 阿武隈の水狂ふとも
義を見て勇む雄叫びに いかで勝らむ益良雄よ
いざや正義の矛把りて 尊き使命果さなむ 果さなむ

-2-

紫の旗ゆくところ

♩ = 78

むらさきのはたゆくところ
いづこにかわがてきあらん
きそひたてわがけんだんじ
ふるひたてわがけんだんじ

紫の旗ゆくところ

一、紫の旗ゆくところ

何処にか我敵あらん

競ひ立て我健男児

奮ひ立て我健男児

二、打てば勝つ我歴史こそ

昇る日の光に似つれ

我主義は正義と進取

矛とりていざやしめさん

三、攻めよ打て鍛えし腕を

試すべき時こそ来れ

何物か我等の敵ぞ

握らん覇権の剣

天地の正気

♩ = 72

てんちのせいきひとのかも
はーるはあさかのおかーのべに
あーきはいすずのつきかげに
あつめてなーれるけんだんじ

天地の正気

(凱歌)

一、天地の正気人の華も

春は安積の岡の辺に

秋は五十鈴の月影に

集めて成れる健男児

二、一度鉄腕振ふ時

勇める敵の影もなし

再びたたば玉冠は

己が頭上に輝けり

三、全勝の栄今ここに

芙蓉の峰の朝ぼらけ

光照らさん隅もなく

見よや安積の健男児

送 歌

♩ = 94

ぎふんみなぎるますらおが わかきちしおにきたえたる
そのはくじんのひとふりに ぎんさをそめんときはきぬ

-7-

送 歌

- 一、義憤みなぎる益良夫が
若き血潮にきたえたる
その白刃の一振に
銀砂を染めん時は来ぬ
- 二、破るる肉に躍り立ち
骸骨砕くも蕭条と
砂塵をたてて天をつく
芙蓉を夢と言うなけれ
- 三、見よ桜章のさすところ
野花の色もうらかれて
万象声をひそめては
竜車は永久に光あり

-8-

勝利の歌

♩ = 78

あきようらくのかぜにたちながるるくもをぬうひかり

かしらにまといもろかたのちからこくをつんざくか

—9—

勝利の歌 (迎歌)

- 一、秋揺落の風に立ち
流るる雲を縫ふ光
頭にまとい双肩の
力虚空をつんざくか
- 二、五十鈴湖畔にきたえたる
いざ鞭あてて勇ましく
腕を振ふはこの時ぞ
安高選手に勝つべきか
- 三、勝利を告ぐる関の声
天下の粹ぞと仰がれて
安積山上秋月高く
輝く選手のその勲

霜に乱るる

♩ = 96

しもに みだるる あ かつきの しらつゆふんで わ れ た て ば
くわ の じ か よ ふ あ さ か ぜ に わ か き ち ゆ ら ぐ き ょ う ー ね つ や や
レ ヤ レ ヤ レ ヤ グ ル マ イ タ ホ ー ド ン ガ ド ン ガ ド ン ガ ド ン ガ ド ン ガ

-11-

霜に乱るる

(声援歌)

一、霜に乱るる暁の

白露ふんで我立てば

桑野路通ふ朝風に

若き血ゆらぐ狂熱や

ヤレヤレヤレヤグルマイタホー

ドンガドンガドンガ

ドンガドンガドン

(これを各節毎にくり返す)

二、我ゆくところ君も見よ

鉄露二百里東北の

一挙に敵を蹴破れば

嗚呼敵陣に生氣なし

三、桜の香薫ばしく

関の以北に幾歳か

七州の覇とうたはれし

嗚呼安高の健男児

-12-

唯に血を盛る

♩ = 76

ただにちをもる かめならば — ごせきのだ—んじ よ— —なきも
 たかうつむねの — じん だ い こ たまの —ひびきを つ た へ つ つ
 ふめつのしんり せ んとうに すすめとなるを いか にせ ん

—13—

唯に血を盛る

一、唯に血を盛る瓶ならば

五尺の男児要なきも

高打つ胸の陣太鼓

魂の響を伝へつつ

不滅の真理先頭に

進めとなるを如何にせん

二、嗚呼戦の秋至る

菊月の空朝晴れて

八州の勢物凄く

空に嘯る鳥の声

若き男の意気上がる

唯これ響く陣太鼓

—14—

嗚呼天日の輝きに

♩ = 84

あ あてんじつ のー かがやきに あーさ かげんとう はるたけて
 ほくもんのーそと ぜっーちように ほこりとてーれる いーすずうみ

嗚呼天日の輝きに

一、嗚呼天日の輝きに

安積原頭春たけて

北門の外絶頂に

誇りと照れる五十鈴湖

二、猛獅子一度嘯けば

砂漠の砂にひれ伏して

憐みを乞う群獣の

その醜態をここに見よ

三、正意気今か優勝の

歴史に恥を残さじと

奮へや安積の健男児

奮へや安積の健男児

四、北磐梯の霊峰に

南はうねる阿武隈の

桜花散る安積野に

誇りと照れる五十鈴湖

チャカホイ節

♩ = 102

さくらかざ しーたあさかーのけんじ
うーでがなるぞえちがもえーるチャカホイチャカホイ

-17-

チャカホイ節

- 一、桜かざした安積の健児
腕がなるぞえ血が燃える
チャカホイ
- 二、打てよ打て打て根気の限り
白の二本筋伊達じやない
チャカホイ
- 三、死のと生きよと男の生命
骨が舍利でも負けやせぬ
チャカホイ
- 四、守れ守れや八幡菩薩
鍛えきたえし我が選手
チャカホイ
- 五、見たか聞いたか安積の名前
鍛えきたえしその凄さ
チャカホイ
- 六、安積安積と名前は上がる
見よや栄ある優勝旗
チャカホイ

まだ沈まずや敵艦は

※まだ沈まずや敵艦は

まだ沈まずや敵艦は (二度くり返す)

勝利を告ぐる関の声

天下の粹ぞと仰がれて

安積山上秋月高く 輝く選手のその熱

※(もう一度くり返す)

あの娘はだあれ

あの娘はだあれ だれでしよね

ベンベンベンチの 屋根の下

安高に打たれて(ヤラレテ)泣いている

隣りの○高さんじゃ ないでしよるか

天は晴れたり

一、天は晴れたり気は澄みぬ

剛毅の旗風吹きなびく

安高健児の血はほとばしり

ここに立ちたる野球団

二、勝利を告ぐる関の声

天下の粹ぞと仰がれて

五十鈴湖上の秋月高く

輝く選手がそのいさお

磐梯嵐はヨー

一、磐梯嵐はヨー、身にしみわたるヨー

無念の思いにヨー、恨み呑むそかヨー

二、ベストを尽してヨー、戦いたがヨー

戦運拙くヨー、破れ伏すそかヨー

三、夜のとばりはヨー、音なく下りてヨー

選手の肩をヨー、埋む露そかヨー

四、涙を拭いてヨー、広野に立てばヨー

コート隅にヨー、鐘が鳴るそかヨー

五、やよや健児等ヨー、歎くをやめてヨー

又来ん春にヨー、あ、振るそかヨー

敗 歌

一、やよや健児等よ

嘆きをやめてよ

また来む春はよ

嗚呼成すとかや

二、やよや健児等よ

涙を拭いてよ

明日の勝負にやよ

嗚呼意気上がる

ベースボールの歌

(明治二十二年十一月)

一、日頃待ちぬる 今朝はしも

天も一きは 麗かに

ベースボールに 究竟の

小春日和ぞ 愉快なる

学びの道を 修めんに

運動こそは 大事なれ

例へ才智に 富むとても

身 弱くば 何かせん

いざや人々 諸共に

出でて勝負を 競ふべし

二、敵と味方の 勢揃ひ

白と赤との 勢揃ひ

用意もすでに 整ひて

合図の喇叭 待つばかり

やがて戦ひ 始まらば

昨日の友も 今日敵

敵の打つ玉 強くとも

恐れず我等は 受けとめん

たとえ手足は 痛むとも

撓まず我等は 防ぐべし

三、早や戦は 始まりぬ

早や敵兵は 疲れたり

敵を破るは 此の時ぞ

衝かすな味方 努力せよ

一分間も 経ざるうち

味方の順番 廻り来ば

力の限り 攻め撃ちて

敵に息をば つかすまじ

団 歌

一、紫の旗に吹く嵐

受けて立つのも武士の意地

五十鈴湖の千鳥に意気地があらば

安高健児の意気に泣け

二、阿多々羅下しに顔背け

忍んで泣いた涙雨

現在は涙を振り捨て

生命を賭けて闘うか

三、嘲笑わば蜂螫の

どうせ儂い生命なら

男の意気地何処までも

「誠」の道を一筋に

四、握り締めたるこの拳

祈りをこめて虚天を突く

一緒に賭ったこの夢の

身に染みわたる夜の雨

五、明日はこの身が散らば散れ

燃ゆる生命に悔いは無い

「誠」の一字に生命を賭けた

嗚呼安高の旗は行く

剣道部

立て〜〜〜や健男児

覇気ある健児よ

自彊の太刀をば振りかざし

覇者の剣把りて立て

打てやこらせや我等が敵を

立ちて勇姿を示す此時ぞ

一、安積安積と名前は上る

見よや栄ある優勝旗。

チャカホイ〜

二、打てよ打て打て根氣の限り

白の二本筋伊達ぢやない。

チャカホイ〜

三、見たか聞いたか安積の健児

腕が鳴るぞい血が燃える。

チャカホイ〜

四、守れ守れや八幡菩薩

鍛へ鍛へしその凄さ。

チャカホイ〜

競技部の歌

一、雨の朝や風の夜も

鍛えきたえし健脚に

一千哩突破して

見よや安積のランニング

勝利の鐘は耳朶をうつ

月の桂の栄冠は

安積の健児の上にある

三、見よやいちだの胸章は

紅したたる浄血に

はや劣敗の跡たえて

又優勝の肉躍る

四、安積健児の神跡は

恰も鳥の翼のごと

虚空天外飛翔せん

我战友はスパルタよ

柔道部の歌

一、桜花散る柔道の庭は

若き命の捨てどころ

勝つて来い 勝つて来い

二、締めて殺せや相手の奴ら

安積健児のその意気で

勝つて来い 勝つて来い

三、胴着枕に転た寝すれば

夢に浮かぶや北上船

勝つて来い 勝つて来い

安高小唄

一、何故かの誰かの言うことにや

郡山の町のその中に

粹な学生が住むという

一度は惚れてみたいもの

二、金の葉が散るアカシヤの

森にデーんと聳え立つ

安高健児の学舎に

一度は入ってみたいもの

三、胸のバッチにすがりつき

連れて行きやんせ安高へ

連れていくのはよいけれど

女の座る席はない

四、座る席がないならば

せめて二人で寄りそって

アカシア林を散歩して

カッコの鳴くのを聞きたいわ

五、カッコ鳥もよいけれど

文明開化の世の中で

意気と闘志の健男児

未来の世界を背負う奴

六、可愛いあの娘にやふられても

泣いてたまるかこの俺が

俺が泣くのは唯一度

男が結んだ友情さ

五十周年記念式行進歌入選作

その一

一、頭上にかざす 桜花

春を迎へて 五十年

朝日ににほふ 栄光は

安積の天に 輝けり

二、剛健の旗 押し立て、

質実の楯 見に擁し

九百の健児 意気昂く

若き生命に 躍るなり

三、兄弟こゝに 打ち集ひ

共にことほぐ 此の佳辰

我等の胸に 新なる

希望の力 起こるなり

その二

一、安積の春の 色映えて

紫の雲 光あり

今日ぞ我等の 記念祭

祝へや祝へ いざ友よ

二、剛健の旗 翻し

七州の覇と謳はれて

創立こゝに 五十年

祝へや祝へ いざ友よ

三、時代の嵐 荒ぶとも

我は正義の 矛とりて

栄光ある歴史 伝へなむ

祝へや祝へ いざ友よ

安高賛歌

♩ = 92 力強く

和知恵一 作詞
妹川秀樹 作曲

れ い め い の く わ の じ に む ら さ き の は た を か か げ て あ た
 ら し く れ き し を あ ゆ む き は く こ こ
 に あ つ め て き ず く わ れ ら の あ
 さ か あ さ か あ さ か の ち か ら ま な
 ぶ も の の よ ろ こ び こ こ に あ ふ れ る

-23-

安高賛歌

(八十五周年入選作)

作詞 和知恵一
作曲 妹川秀樹

- 一、黎明の桑野路に
紫紺の旗をかかげて
新しく歴史を歩む気魄
ここに集めて築く
我らの安積安積安積の力
学ぶ者の喜び
ここに溢れる
- 二、白日の阿武隈に
質実の力をくんで
限りなく進歩をめざす根気
ここに集めて競う
我らの安積安積安積の力
学ぶ者の喜び
ここに溢れる
- 三、夕映えの安達太良に
俊秀の誇りをいだいて
たくましく飛躍を求め熱意
ここに集めて進む
我らの安積安積安積の力
学ぶ者の喜び
ここに溢れる

安積高校百周年記念賛歌

境野周一作詞

馬場憲衛作曲

$\text{♩} = 108\text{位}$
maestoso

みどりこきまつのかかげにまなびしと
よきょうのひをいかにまちしかあさかのをふき
まくかぜにたえしあのととききたえ
しあのひよあさかあさ
かわれらがほころうあゝ
ひゃくねんのれきしをきざむ

安積高校百周年記念賛歌

- 一、緑濃き松の樹陰に学びし友よ
けふの日をいかに待ちしか
安積野を吹きまく風に
耐へしあの時鍛へしあの日よ
安積安積われらが母校
ああ百年の歴史を刻む
- 二、桜花咲き継ぐ庭に学べる友よ
質実の気風を受けて
安達太良の嶺仰ぎつつ
励むこの時ことほぐこの日よ
安積安積われらが母校
ああ百年の歓喜を歌ふ
- 三、紫の旗もつ本に集ひし友よ
喜びの声高らかに
開成の土踏みしめて
拓けあしたを輝く未来を
安積安積われらが母校
ああ百年の栄光永遠に

題 字：第36代校長 渡 邊 專 一
採 譜：斎 藤 重 男
監 修：湯 浅 讓 二
写 真：旭 写 真 館



安 積 の 詩

編 集 福島県立安積高等学校桜桑会
発行責任者 桜桑会会長 佐藤正廣
発 行 2008（平成20）年4月1日
印 刷 不二印刷株式会社